

編集：山田浩司 & 美澄

Address: 2208 North Quantico Street, Arlington, VA, 22205, USA

Phone: 1-703-241-0621 E-Mail: mickeyy@pc4.so-net.ne.jp

美澄ママ、合気道五級に合格す！

これまではっきり書いたことがあったかどうか記憶に乏しいが、美澄は昨年6月からアーリントン郡にある合気道教室に通っている。剣道に比べて合気道の道場はかなり多く、特に、ペンタゴンに近い関係でアーリントン郡には軍関係の住民が多いため、護身術としての合気道のニーズは相当あるのかもしれない。美澄が通っている「ノーザン・バージニア合気会」は、自宅からは決して近い道場ではないけれど、見学してみた美澄が最も入りやすいと判断して通い始めたところで、郡のコミュニティ・スクールとして認可されていて、初心者には入りやすかったらしい。



合気道の段級審査は、練習時間の累計によって受験時期が決まる。だから初心者は必ず五級受験と決まっている。オークトンの剣道クラブで、現役学生のシュワートやケノンが最初の段級審査で三級をもらったのとは大きく異なる。合気道では五級を受験するのに60日、四級を受験するのにそこから80日の練習が必要だとか。初段受験のレベルまで習熟するには、10年近く練習していなければいけないらしい。

ということで、道場通いを始めてから6ヶ月が経過した美澄ママは、いつも指導を受けている坂本先生からの勧めで、3月16日（土）に五級を受験することになった。場所はメリーランド州シルバースプリングの「キャピタル合気会」道場、私がお世話になっているボルチモアの武道具専門店「キヨタ」の御主人に言わせると、DC周辺の道場の中では最も名の知れた日系人の先生がいらっしゃるらしい。

2月頃から、美澄ママは、それまで週1回しか通っていなかった練習を週2回に増やし、試験に備えた。練習時間が足りていれば、地元でやる段級審査なんて通過儀礼的なもので、よほどあがって頭の中が真っ白にならない限り、練習通りにやっていたら不合格になることはない。それに、こうした試験の前には、必ず「セミナー」と称する練習会が行なわれるので、それまでの稽古の復習を当日やることもできる。審査する側も普段指導している先生方だ、試験での演技が多少悪くても、普段の練習時の態度、努力する姿勢といったプロセスも加味されるだろう。だから、「よそ者」がやって来て公平な目で審査を受けるのに比べて有利なことは否定できない。「よそ者」が受験すること自体が珍しいだろうが。

だから、私は美澄ママが行けば合格だろうと予想していた。当日は、セミナーの前に美澄ママを会場に降ろし、私は子供達を連れて、ボルチモア鉄道博物館にピクニックに出かけた。帰りが遅くなり、午後2時から始まった審査には間に合わず、ママの勇姿を見ることはできなかった。その場で結果発表が行なわれたわけではないが、受験者全員の演技が終わってセミナーが解散する際、皆がお互いに「おめでとう」と言い合っていたので、多分全員合格なのであろう。ママも同じ道場の友人からお祝いの言葉を受けていた。おめでとう！次の四級まではさらに80日を要する。せめて、滞米生活の残りの期間中に、四級には到達していて欲しいと期待している。

しかし、合気道の稽古場が静かなことと云ったら、気合みなぎる剣道の道場の騒々しさとは対称的だ。落ち着きがなく、すぐに大声を張り上げる我が家のチビッコ・ギャングには、まったくもって不似合いな場所である。私と子供達は審査の最中に入ってきて全員の演技が終わるまで見学していたが、子供が些細な雑音を出すだけでも多くの人がこちらに振り向くので肝を冷やした。もう一つ覚えた違和感は受験者の「気迫」だ。護身中心の武道であるため、「気迫」が表に出ない方がむしろ好ましいのかもしれない。「気迫」で相手の構えを崩すという「攻め」重視の剣道とは180度性格が異なるようだ。

浩司パパ、大学院に再入学

「私の仕事」シリーズ番外編

私は、岐阜県庁国際課の知人が主催している「地域主体の国際協力」のメーリング・リスト（ML）に登録している。ここのMLは、東海地方で行なわれている国際協力関係のイベント情報の案内が中心で、たまに出てみたいと思うイベントがあったりする。「ペシャワール会」という福岡のNGOがアフガニスタン西部で行なっている井戸掘り事業について、代表の中村哲医師が紹介した講演会なんて、聞いてみたいと思ったものだ。田舎とはいえ、こんなに沢山のイベントがあるという事実には驚嘆させられる。そんなMLに、1月の中頃、日本福祉大学通信制大学院国際社会開発研究科の募集案内が載った。

今だから言うが、私はJICAネパール事務所に勤務していた頃、もう一度学生になって勉強してみたいと密かに考えていた。妻もいて子供もいて、家庭を守る身であるから、JICAを辞めて収入ゼロになることは難しい。やれるとしたら、夜学か通信制しかない、そう考えていた。基礎初等教育分野の援助調整で世銀やデンマークから苛められていたネパール時代に最も必要性を感じていたのは教育行政の勉強だったが、東京の本部勤務に戻った後は、経済計画に変わった。経済学、開発経済学については一通りの知識はあるが、例えばネパールのような国が自律発展を遂げるために、ODAに何ができるか、単に道路や橋、学校校舎を建設するだけじゃなく、どんな経済政策導入を働きかけたら、インフラ整備に必要な資金を国内調達や外資導入で賄い、民間企業が成長し、税収があがるようになるのだろうか、それをもう一度頭の中を整理してみたかった。（IMFや世銀のエコノミストだったらそれができるのかというと、必ずしもそうじゃない。下手な処方箋を相手国に緊急融資条件として提示してかえって傷口を広げてしまう失態を、IMF・世銀は1997年のアジア通貨危機の際にやっている。）

夜学にしても通信制にしても、東京でやるには職場と家族にかける負担は大きい。どうしても自分のニーズに合うコースが見つ



けられないでいるうちにアメリカに来てしまった。こちらであれば、帰宅時間の計算が立てやすいし、子供もそろそろ自分達で就寝できる年齢になってきた。そこに来てようやく適当な通信制のコースと出会ったわけで、今やらないと次にやる機会がいつ巡ってくるかわからないと思った。すぐに出願書類を揃えて2月中旬に願書を提出、書類選考を経て、3月6日に合格通知は届いた。もう、こうなってはやるしかない。

通信制というとテキストが送られてきてそれを基に課題論文を提出する形式かと考えがちであるが、そこはIT革命が進んだ現代の教育業界のこと、ベスト・プラクティスを集めたインターネット・ベースのEラーニングである。当然、教授陣とのコミュニケーションも殆どが電子メールによるものだ。テキストを読み、課題論文を毎月提出するような形式では、よほど意志が強くないと続かないだろうが、ウェブ・ベースで進捗を逐一チェックされるようでは、毎日少しずつでも進まなければならない。これから、JICAの技術協力や職員研修もEラーニング方式がどんどん導入されてゆくことだろうし、個人的に先取りして経験しておくのも悪くない。

Eラーニングといったらご当地のメリーランド大学が有名なのに、なんでわざわざ日本福祉大学なのかと聞かれそうだが、さすがに自宅まで英語のウェブサイトは見たくないという「弱音」が見え隠れしている。

きらめく剣の舞、ワシントン桜まつり2002



日本の多くの地方が3月末には桜の季節を終えていたのに対して、ワシントンDCの桜は3月下旬から開花が始まり、4月第1週には満開を迎えた。

毎年、DCでは、当地の日本商工会等が中心となり、3月下旬から4月上旬にかけての約2週間、「ワシントン桜まつり」が開催される。今年は、その中のイベントの一つとして、3月30日(土)、DC界隈のいくつかの武道家、武道クラブが集まり、ジェファーソン記念堂の前で、武道の実演会が開催された。居合道、テコンドー、空手等と並び、我が志道学院ワシントンDC「和心館」道場が、剣道の実演でおおとりを務めた。

実演は、コネチカットから来られた加藤先生（七段）と鎌田先生（五段）による真剣による日本剣道形演舞、オークトンの子供剣士と先輩剣士による基本打ち込み、有段者ペア 4 組による三本勝負、加藤先生による居合演舞の 4 部構成で行なわれた。子供以外は殆どがロックビル組からの編成で、オークトン組から出たのはヤン先生とマホーニー先生だけで、私は演技には参加しなかった。



天候が心配されたけれども、幸いこの日は気温 20℃を超える晴

天で、青く晴れた空と、満面の水をたたえるタイダル・ベイシンに、剣士の掛け声と竹刀の響きがこだましました。昨年 9 月 11 日の同時多発テロ事件以来、DC から遠のいていた観光客も桜まつりを契機に元に戻ったようで、この日タイダル・ベイシンを訪れた観光客は、昨年を上回っていたのではないかと報道されていた。ジェファーソン記念堂周辺で、これだけの見物客が集まっているのを初めて見た。

見物客の中には、志道学院の剣士も多く見られたが、大半は初めて見る日本の武道を好奇の眼差しで見つめる客だった。私が座っていた周囲の観衆の中からは、「(面を付ける前に頭に巻く手拭いを見て) 何で頭にタオルを巻くの?」という質問が聞こえてきたし、特に子供チームが横一列になって一斉に先輩剣士に打ち込む姿を見て「何やってるの?」と笑い飛ばしていた観客もいた。私達にとって普通に見えるものが、実は一般大衆にはわけがわからずただおかしいだけというケースはかなりあると思う。「紙一重」とか、「攻め」「駆け引き」の概念は、実際に経験した者でないとなかなかわからない。日本刀を振ってあの空気を切り裂く音を出すのがどれだけ大変なことかを知らない人にとって、居合実演はただ刀を振り回しているだけとしか映らないのではないだろうか。

そんなことを考え、観客の反応を見ながら、少し寂しい気持ちになったのだが、演技の後、ステージ前で当館の案内ビラ配布を始めたところ、かなりの人数の観客が持って行った。これが会員増加のきっかけになればいいと思う。昨年 3 月頃に 30 人以上いたオークトンの常連は、1 年後の現在は 10 人程度に減っている。



タイダル・ベイシンの桜は丁度見頃、この日は家族全員で車で出かけた。ホワイトハウス西隣の道路から南下を試みたところ、ひどい渋滞に巻き込まれ、さらには駐車場確保で時間を取られ、あやうく実演会に遅刻するところだった。実演会の後は、ゆっくり散歩しながら桜見物を楽しんだ。去年は JICA・世銀定期協議に桜の満開がぶつかり、さらに協議会直後にジャマイカに旅行に出かけたので全く桜を見られなかった。今回は満開の一步手前だったけれども、タイダル・ベイシン周囲の桜を見ながら、テロによる観光収入激減を予想していたわけではないにせよ、日本は DC の観光復活に心憎い贈り物をしてくれたものだとつくづく感心した。

先月号の「サンチャイ通信」送付先の方々から、美澄ママの通っている「学校」とは何のことかとの問い合わせを受けた。本人はやってゆける自信がつくまで明確に言及するのを控えて欲しいと言っていたが、さすがに通学開始から2ヶ月が経過、毎週月曜日のテストも9割以上の正解率を維持しており、25人のクラスが18人に減っても粘り強くサバイバルしている。4月中旬の中間試験も視野に入ってきた。もう大丈夫だろうと思うので、今回種明かしをしたい。

「マッサージ・セラピー」・・・それが美澄の学校だ。場所はウェスト・フォールズ・チャーチ駅の近くで、毎週月曜日から木曜日まで、朝9時15分から午後2時15分までのプログラムである。このタイトルからして大方の読者の皆様は、「あんま」「指圧」「足マッサージ」等をすぐに思い浮かべると思うが、アメリカではセラピストは免許として認可されており、マッサージの歴史や理論といった座学から実技に至るまで相当幅広いことを学ぶようだ。テキストを覗いてみると、「〇〇筋」とか「〇臓」といった、英語のネイティブ・スピーカーでもよく知らないような単語が多く、ましてや英語が母国語でない外国人が学ぶのはそれなりに大変だ。世銀のプレイ・グループで知り合った御夫人から教わったらしいが、2~3校検討した上で、今の学校に決めた。1月末からスタートしたクラスは7月末で終了予定。終了後は資格試験が待っている。

2000年12月にこちらに来て以来、美澄も他の日本人の奥様方にならって、何か勉強したいと常々思っていたが、私の2年という任期を考えると普通の大学には編入できない。隣のニーナが看護婦として働いていたこともあり、私がこの後また衛生状態の悪いどこかの途上国に赴任する可能性も考えたら、看護学を勉強するのがいいとも考えたようだが、日本で3年かかるものがこちらで2年で終われる筈がない。結局、半年で終了できるコースに落ち着いたわけだが、最近、世銀のオフィスのパソコンとにらめっこが続き、肩凝りや腰痛が絶えない私にとって、我が家にマッサージ・セラピストがいてくれるのはラッキーかもしれない。

ただ、当然のことながら、予習復習は大変だ。子供達を午後10時まで寝かしつけるのはパパの仕事であり、美澄はその後の2時間ほどを勉強に充てる。週末は土曜日はスキー、カラオケ、ショッピング、合気道昇級試験等といったイベントを入れるが、日曜日の日中はなるべく勉強に充てている。家族がいてはうるさかろうということで、パパは子供達を近くの公園で遊ばせたり、サイクリングに連れて行ったり、子供達とお付き合いだ。幸い、我が家の子供達は公園で遊んでいても他の子供達と簡単に仲良くなって一緒に遊んでくれるので、うまく行けば3時間近くを公園で過ごすこともある。とはいっても、やっぱりジャングルジムとかで遊んでいると危ない遊びもするし、ブランコに乗れば「押せ」とせがむ。優雅にベンチで読書か、素振りでもやろうかと思って私もいろいろ持って行くが、なかなか自分のことだけやっているというわけにもいかない。



あたしたちも協力！ ママ、がんばって！！

とにかく、ママには頑張ってもらいたい。アメリカ生活の中で、「これだけはやった」という勲章を持って日本に帰ればと思う。ママにとっては、それが合気道であり、マッサージ・セラピーである。子供の面倒を見ながら、これだけのことをやればスゴイことだと思う。胸を張って良い。

今月の世相

- **エクスポスは本当に DC に来るのか！**：「サンチャイ通信」1月号編集後記で少し紹介したが、客が入らず大リーグのお荷物球団と化しているモントリオール・エクスポスが来年ワシントンに移転される見込みだ。ノーザン・バージニアの新興ビジネスマンを中心とする投資家グループによると、当面はDC内のRFKスタジアムを使用し、いずれはバージニアに新球場建設を目指すとか。しかし、これに反対の意向を表明しているのが、ボルチモア・オリオールズのオーナーだ。DCとボルチモアは50kmほどしか離れておらず、DCが大リーグ球団を誘致すると、DCからボルチモアに来るファンが減ると指摘している。でも、考えてみてほしい。エクスポスはナショナル・リーグ、オリオールズはアメリカン・リーグだから、2000年のNYのメッツとヤンキースみたく、ワールド・シリーズで戦うことだって、可能性がないわけではない。それに、オリオールズの根拠地カムデン・ヤードは、全米屈指の美しい球場だ。エクスポスがDCに来たからといっても、球場がきれいで、チームも強ければ、ボルチモアの客足が細ることはないと思う。要は強ければ客は入るのだ。オリオールズには、きちんと戦力補強をして、ヤンキースと地区優勝を争えるチームになって欲しいものだ。今年のオリオールズは、リプケンが引退したけれども、若手投手陣が強力で、阪神以上の高勝率をオープン戦で記録した。イチローや佐々木、長谷川のいるマリナーズだけでなく、野茂と石井のいるドジャースも6月に遠征して来る。日本人選手だけじゃない。今年は大リーグのスーパースターを見るために、どんどんカムデン・ヤードに行くつもりだ。
- **産みの親よりも育ての親？**：千智が通っているホーム・プロバイダのマリ先生のところには、トビーという中国系の男の子がいる。以前美澄が千智を引き取りに行った際、トビーの父親と挨拶したが、それから暫くして、千智を引き取る時にちょうど来ていたトビーの保護者という男性が、前回会った人と違うのに気づいた美澄は、「あれ、彼どうしたの？」と尋ねた。その人は、「彼は私のパートナーなんだ。」と答えたそうだ。さすがに美澄はそれ以上はつきり聞けなかったようだが、要するに2人は同性愛者のカップルで、トビーは、2人が認知して親子関係が初めて成立したのだろう。この類の話はそれほど珍しいことではないらしい。子供のできない男女のカップルが血縁関係のない子供を認知するケースはもっと多い。ただ、さすがにその子が成長して、両親が同性愛者だとわかったらどう思うだろうかと考えると、いくら契約社会だからといって、親子関係まで契約と割り切れるのかどうか、疑問に思ってしまう。それとも、子供が経済的に独立したら、親子の契約関係も解消されるとでもいうのだろうか。
- **辻元議員のお陰で NGO はイメージダウン？**：先月の続きになるが、鈴木宗男衆議院議員の証人喚問での辻元清美議員の質問は、見ていて腹が立った。事実関係から論理的に追及してゆくというより、証人を罵倒して悦に入っているだけという気がした。「疑惑のデパート」を「疑惑の総合商社」と言い換えて、何が新しい事実として出てくるというのか。あれじゃ、国会でよく聞かれる「ヤジ」と同じだ。私は、国会議員になる前、ピースボート時代の辻元さんの活動は、雑誌等を通じてよく知っていた。胸を張れる活動をしていたと思う。それなのにあの証人喚問、そして政策秘書の名義貸し疑惑発覚直後の拙速な記者会見、議員辞職後の記者会見、聞いていて、市民活動家としての底の浅さを嫌というほど見せつけられた。辻元さん、政策秘書の名義貸しで浮かせた資金を事務所活動経費に充当するなんてことは誰だってやっていると言った。そして、他にもっとあくどい裏金作りをしている政治家なんて一杯いるのに、なんで（国政の場で正義を追求している）自分だけがこんな目に遭うのかとも言った。大義の前には政治資金規正法違反など微罪だということか。NPO・市民活動団体出身の花形プレーヤーにして法令遵守意識がこの程度では、護憲論者、市民社会の代表者と称する社民党も先が知れている。そして、それは、1月以来脚光を浴びた NGO（開発協力を志向する NPO）にとっても大きな逆風になると思う。NGO

に ODA 資金を活用してもらう際の最大の問題点は、日本の小規模な NGO にとって、公的資金を受託するに当たって求められる発注側への報告義務遵守が相当難しいということにある。政府は、これまで、この報告義務を簡素化する方向で NGO と対話を図ってきた。ところが、鈴木議員の疑惑が拡がったことにより、ODA の使途と効果に関する説明責任が大きくクローズアップされ、報告義務がまともに遵守できない NGO への事業委託が容易でなくなりつつある。そこに、市民活動団体出身の辻元さんのこの事件だ。ルールをまともに守ってくれない団体に、公的資金を流し込むことなどできないという風潮が、もっと強まってくるものと思う。

編集後記

- 3月4日、ワシントンの日本人援助関係者の勉強会で、私が発表を行ないました。題して「ある JICA 在外事務所員の懺悔録～ドナー調整会合はかくも難しい」、私が JICA ネパール事務所に勤務していた 1995 年から 98 年にかけて、現地で行なわれた基礎初等教育分野での援助調整での苦労話を披露したものです。当時の記憶はだんだん薄れてきていますが、そこで役に立ったのが「サンチャイ通信」製本版でした。読み直してみると、記事の端々に他の援助機関と大使館、JICA 本部との間で板ばさみになった苦しみが滲み出ていました。今、こんな形で当時の記録が役に立つとは思いませんでした。最近の「サンチャイ通信」では「私の仕事シリーズ」がとんとご無沙汰ですが、今月から先ずは番外編として復活させることにしました。(浩司)
- 本来なら、せめて編集後記ぐらいは美澄ママにも書いてもらいたいところですが、実は今、ママは 4 月 15 日の中間試験に向けて猛勉強の真っ最中。4 月上旬は、私の仕事の方で世銀と JICA、世銀とデンマーク外務省の年次協議が立て続けに入ったため、早めに出勤、遅く帰宅の日々が続き、ママは子供の面倒で十分勉強できませんでした。樹生が季節の変わり目の風邪で 2 日幼稚園を休んだため、ママも学校を休まざるを得なくなりました。補習授業を取ったりして挽回に努めているようですので、今回は静かに見守りたいと思います。(浩司)